八笑人第四編

上

へ13
3094
9

甲府市立図書館
文々堂

特
へ13
3094
9

序

這八笑人といへる小冊。先年梅ゝく。世に
梓めたる唐詩花曆なる按本。いよ〳〵
登瀛亭主人。吾師狂訓亭主
人。ともに。彼物語の臺戲人。六三年六鏑
乃。丈のるる艇。笑の果。噂者。笑味を紹し

すべ可笑ふ。一家打風俗をはらはらと。
想のかきごゝろ見がゐたゞぼさきんと要を
あゝ。淫乱の妙臻まで竭き尽。然るに
扨人八篤実く。専ら世ノ人情をはりの
やうく繁わるく。仮りも勧善ありぎまゞ。
毫と耕ら淫慾を忘れ。書綜ぶと

四角だらで。珍文漢籍の遠祖く。老ら成
止むる弱本履ノ。書ふうく渡門と
やうる。所を弱て皇国風。きのも来彩と
源門を人情史ハ著ぶ。青とぎ所処
わうと。同種の生涯で活生る。比する方函
圓蓋ち。ゑぶひろ中ふるハ。右ふうう左へ

よりこと。合きく不意吋八笑人。中〳〵
潮出る東の松。雪とまみゞの川風ふ。吹
るゝ其の山出一男。笑〳〵ぞうりを用意そ
不屬一方の放蕩を。此序を書と命
るゝ中〳〵ふ。粥童をとりゞ嘱。冠雅な人〳〵の
そのにく。散癡漢出傾城。智恵袋

俳諧ゆるゝ。ゞまゞ狂ど。遠山の眉紙の墳前
にす除事をまりとゝの。緑橋西岸
市隠の食客。原の狂名流亭多更。
今を流を引〳〵。面作者の其一個。

東船笑登満人誌

眼七が通力
高田ゆ
蛍をとだす

花暦八笑人四編上巻

童戯人　瀧亭鯉丈綴

一切衆生の薄地凡夫の八葉の蓮華あつく。取も直さず出来合の如来ありとハさる説法場の耳学問其八葉の開き数ハ人ゆゑ世の垢よりどれと種の八笑人。女を見る目と喰物わ分ち咽の其外ハ無能種何度も幼ねが佛髄中へ

池の鏡の花蕚と折とりけまと左次郎が例の庵へ寄りて集ひ来ぬ。めぐらすの菓番の廻向舌を巻葉の横ぐるに立て立て立菓の年合点は指ゆそハ二度三度惣身ハ流す汗の露玉とめざひく一トユ丈今度ハ是非ハとて無の紅を磨く光りも鮮くと簡を高田の蛍狩用意ハ手ぬぐ取とめて廻向をけれバ主の左次郎　時ハ如斯八人つろ

揃ッて居るが毎度出くされねえあいちまるノ　野呂松「モ
あよきるそうあだりよくッてき運のうりいのごろら
仕方がねえ　アバ大郎「ヘン冒ッけのようなやつがるたく。
左二「ヲヽこれど野呂松ながいの通りかく書くしん仮名
だが鬼角悪運ふーセ。えんゲンの呼く形と仕ンで
ゴが出来るどおも思ひまきこいの支ゴが生まるのご
こうは初り趣向のまりいのでまるゝ寝ままる
ぎやうはへの　頭武「うんの其様ふたん甚き鳥けまるものめる

ものもまるが一番座直しをきて出るうら。きつうして
居ゴ主　左二「ナニ おらう陵ハ出ゆア来ねえゼ　頭武「アゴ是ゼ
非ともるものごみやびと言ゴ者ゴとひるびと出ゆう
ハ解ーごこいテ。るげるゴ。ハ支ゴゾ　吞七「ナニ おらら
達ゴ来るびるものう　左二「ヲヽくだまつく風るゴ。陸武
ゴもでぶきゴくるうこデ。マそこでまゴゴやびと言
葉ごいゴ。ハの人の家ゴのゴ　陸武「こやびといハ。マア
ゴゴぶりとゴゴ　野呂「ハア一中節の言葉でたん甚花

八笑人四編上
四

八笑人四編上
三

といふのハきんの事さ　アバ「あぶく文霞の中に咲匂ね

の小車落着といふがあるから其事だらう　眼武「ぎれッ

たくさらわ人で合くだろ。いやひさのひるびさのことに

ハ都ぶりとひるぶりといふのでまづ都ぶりとハきんらん

さるのお出挨ハ下々までがあのぼつら雲上で言

葉づかひもまちがつた事やどんさある事ハねへハサ。

そこでよひるぶりといふハまづ早くいへバ　左二「いんにやまづ

うわめてんざつしとかいふへよく聞く通でへつこりハ子。

ひるぶりといふのハ　眼七「きん玉の黒いのがころりころりの

寒い事をひるぶりのきん玉のよふだといふぜ　左二「是サアア

ねぜろけへ〳〵ちやアごりいまじめな噺しだハフン其ひる

ぶりといふハ　眼武「マア俗に云へバ　左二「いんにや坊さんでも

いくら本とふの事がいゝ　眼武「チヨツきぜろけへするならよ

そう　左二「アヽめんまり〳〵まじめでく　眼武「何もむづ

かしい事でハねへ田舎風といふ事サア　卒八「ハテナそれでハ

都の方で今の様な時疫咳をするらバひるびくるいか。

田舎の方でも。屁でもひるまらねへゾ。

「アッテ。ぶんまわるら田舎もんざ

たん世死とゆへば病とだろう紙居るら田舎もんざ

歎息

とゆの夏よコレよく聞く恵子ごだりくゆ斗りゴ。こん世死

ぶやうねへ今ゐめのようよて。延命も仮成ゴ出来これ

ゼ運ゴ。ろくゆ。あたとたろく斗居る何夏も労して

功ゴ。アッテ是非も浮世ぶやす。ゐんぞとゆのを。

たん世死するとゆい

左ニ「ヘン。べらぼうめそれい歎息と

歎息

ゆゆめゴ

歎息「ハテ歎息ろ。ちろこの遠ひゴ

眼七「カラ入非

入ちやくちやくゆちやくちやの金わ。イケ利こ風ゴ耳

学問のとうぜこ口とこ死こゴるら。仕ゴるのゴ。

「元の初ゴ居るこらの。何も人こゆ死ぬ人ゆ

ぺらぺせる夏ねへゴ。ろくゆ。ゴ出目助よ世人ゴ人の

天窓を押ものゴ

昔「此人こらのひやうこれこらのゆ

ゆこらろくゴりこるゴんゴ

「ゴ。ゴ。ゴ。ゴ。と

ゆろろ。ちろこゆやゴもよろろうヨ。

昔「時よ病候

ゴ留つこら。世界を定めよめゴねへ。

「よろろうく。

先左三さんと野呂は卒ぞと何ぞも立派で。仕指
なが。偖また次の狂業ぞ眼ぶが番ぞ　左三「そりゃ
くさが重ぞごろう　卒八「イヤ猿ぞごろうテ　賊「そ
ぞごろう多い一チ番順を今ぞけくく。お是ぞ座ぞを
ぞ。味方の英気をひろくそよくいの気ぞ　野呂「ヘン
今の疾疾のめんぞのぞ。ちぢり味方の英気が。ひッ
居るぞごろう　眼七「ちげへねへ。お人ハ当分出うけね
へぶいく　賊「なぜぶのぞろう　眼七「ママ疾疾のぞえねへ肉ハ

通りハろいい　賊「チョッのまへまりの就ぞ善でも呑ム屋立
眼七「ザア今度ハ人の番でもさしんでお是ぞ自分ぞ平ぞと
ら。ぞ。労して座を直ぞと思くく居る所ぞ今ぞと送くく大
支の場ぞ　出目「そのいくく見ぞ是ぞ平ぞられぞのぞ様
ぐら大ぞなぐら出目ぞ出馬ぞくテ　左三「東西くくんぞ
めらぞのぞ様のぞぐぞぞて見ぞ是ぞ外のて居ぞ今
度ハ出れぐくくと問ぞ論がひねくくら是ハぞのぞが
ろろろ　眼七「ハ是。ぞハぞ。ぞハぞ。えでもれが番ぞごろう

左三「ヲヤ　まとぶりの支をマア聞ッ
盛でるらねへ　眼七「ヘン　即切紙を張るときえ
ひどくひろうでもあるぜ。どうも仕方がねへ長いのいろすごマアご
まてでもんいてゝ　左三「ムシうらみッかくいやアゴる。
すねへ　眼七「是でもいろ〳〵一方ハ拙者
義ろをいふ間でいるうらまんざら豆にもてもあるも
彩の中うらぶごろう　眼七「ムそのやろう　左三「ヲヤ豆藏の
支をいふ。ゴ〳〵ふねへ　野呂「コレおゝまんとうそのごん

為を入るぶりゼ。だれいとうく春中ぐらの支ものちの
運ごとのうるさごろら。仕ンぶッちゃア。おのらをのつらご
よごれらア　左七「そのうへ。ぞうすくもうとあとごろら
野呂「アヲアあやまるあんどん油さ〜。ヨヽイ。サアひうとみごゝコレ
送ッハぶ〜このご　眼七「ヘンぞる狼でもこんなあるあハ
ぶくまの　左八「コウ〳〵荒増世界の定るうちハ問話休題
とゝヒヘンぶとよのうと計ッでハ解〜ごゝろう問話休題
ぶいびごでるくハさて最とのこと。ごぜ　「そ〳〵問話休題の

講訳。んで張りこ十六文。へン続本を学者と知らく。六冊物の二三部もんるを学者よりこつのりご　出目「ふちばく
ねくとこ捨てりゝそくくと笑ごろ。泥くる喜者しく。
ひとりうれたる手ろ。へンよく出来さ猿ごゞ　吞七「サラく
とく相談を極めようとゆめと稲荷町ごらまぎつ久して。
ごらるく引ぱっく居るもくいもんごてくくよ者
ごらるく。ひぱっく居るもくいもんごてくくよ者
ごりごらるんとまごめる相談いどめごろう　左三「たよよ今
ぶ昨日まがゆめ通りゆ僧の支いうすくく人も知って居る

うら番毎仕ごらって斗ると居てもんもひろうも者ねくうら。
ちんど今度ハ一チ番氣をぬのそこいぶごろう　賜「氣をぬくこハ
ぶ八するのご　賜七「そよサ山上へ氣をぬのこら人間さ仏さ獣
ぶ八足ぶ者る斗のこごろう　左三「ゆサ今度の者代ハ高田の
やるが
蛍狩りごろう呼ぶく卒公ぶ怪我の変るうちふ。モ蛍も
来ふなるく。遠ふ場ふハ高田ごハサ今時ごうらうちうち
のそこと蛍を取るふ行人もすくく人ぶ出ねくく。あいち
斗りいろと呼ぶたごまるもくいもくいやるねくう　当目「ゑ成程それでハ

伯樂の
藤治郎
この人さま
雪田
馬湯
尻を
もやせし
茨木の
夏安

れひかまし
人さま四ばう
蛍狩
尻を
足當に
乃
高田
雪湯
右
七寶亭
桝盛

ゆゆし 左三「イヤ最初の拒定ごろら。途中で立消しとハ。今まで
磨ぐ男がとどれるうら 繁「ハアいつみごのしろ氣がつうえんざ
野呂「そふこつのぞ見ると変もねくが大うと天窓の変でもめ
ろうヨそのゆれてうれば日増のいつやぐ出るよまぐ 左三「ま
ゆまゆまいうえちうとハ言葉の花といの変がゆるものぐハ。
ちまちまとちうく咎められてゆまるものこまうて聞ぐゆ。
今のの通り。うんどんの蛍といの景物ハあれゆゆ場ぐら
ハうゆゆ眼七ととの三拍子揃ぐうるねく 繁「ハ芝

居ハヨロシヤへでも賣るぐいく 眼七「あく達ハまりくあれを只
の人のよまの面ありあううみぐチト中ず間遠へみとぐんぐ
られるテ今ちとの暮元思案とちぐうくまぐ弟ハとみぐ。
ヨヘン 左三「ヨヘン。も異変もいらねぐ。足下の変ぐら定て
麹向ハうちうぐ。夜秋市高田までもうぐうちいの荷員
見物もうちうく。何ち當ち業番をする氣ぐ 当「ハアハ
生ねうノ 左三「ニうちう年ち初ハ風流ぐる母ぐ。なまね
ちうそふぐ今ハあんまり生ねうそふぐテ 出目「七五程知て

るくらのうらとくる題を芋す喜もねく　眼七「何や業るの夜
ぐい。類題です人ふとそとるぐべ〜サ。その時眼七すと〜も強
ぐずサ。ね人を無理ふ出〜〜ぐる喜もるー。喜んナぐれ　時筱
の蛍をたうるくぐ〜〜ぐ〜〜と居てもすぐまらねくらと
主八狂言名題〜〜七遍く其うそ淋〜い所へ付う込で
遍向を分とるぐ茶番作といふめぐ　左三「ろ〜ざ。なの
すぐ夏へ出ろるひ出うよ氣ナ　ろぐろていろくらふ元
ねテ　眼七「ナニヲ　ふ元ろるヨ　卒八「マアぎんる喜をいろ波てろ

ぐい。サ存命をふ殘ヤ上げろ　眼七「ヘン聞くびうろ
ろく「野呂　卒八　三盃呑ざ。ろぐ。ヨット合ふく〜「アくうる喜
ふくうるで對〜の對ふ地ぐ。ぐふ七本
ちうとぐまらねくるそう幕ろ〜よ地ぐ。ぐふ七本
続ぐまぐふらるのの　左三「サく〜眼公よみのろ口をきう
ずふぐうと知ナ聞の　眼七「マジ〜ぐ〜獨り呑の国さ夜
行のぐ。ろ〜〜高国ふちのと「ぐ呑ふとい喜ぐ喜ろ
左三「ろ夜八ろのサ　眼七「其酒屋へ上ぐく。ひとうポ〜〜呑

なぶらん姐様狐と呼んだ且つのぶ 繁「ぶうしと狐と呼金
る 眼七「そりゃ腰よるのサ 左三「其後が繁ぶなら狐ネテ
卒八「そのサ狼とハ思れそふぶ狐の方ハぶあぶろ 眼七「何
サ鯉丈が出ると和合人といふ中寺のまゑ狐の尾尾を
ちらと出ちく後ハ思入れいろく仕ちぶりサと
ハけして繁ぶるさんる繁支ハ胸わやるら 出目「とりや
こと。ろと今腰よあるさのぶモウ胸く寺ろら程ろく
口元ろ鼻の先へきそふる紙向ぶ 眼七「マジサ。ぶまろてゆッ

！脚ぶりこるくふ元とでもいぶ。ぶまろりの金ぶ
出目「へンのこるくふもぶ。りくふかあてまろう 眼七「左三さん
ちろとぶろ〜七元る世へ。ぶ。ぶ口をきろ世ね 左三「ふ〜〜
赤面〜〜 眼七「其元ろる支ぶ。ぶるゆろら 左三「元金ら
南北〜〜 眼七「元ちりく。ぶんぶろう向ぶら。まるるら。
ぶれも男ぶ仕様けと本讀とゆわ元ね金ゆら元。
摺りでゆるぶ。へ。ぴろ。ぶる。元とでもまぶけ世エヘン。
まぶ本舞臺三間の方 出目「まぶ本舞ぶ〜〜。

「まづ〳〵ごろうのヨウぎの甚ろうまくいはねへハサ　眼七ハ狂言方杵屋ろくの真ね撲ゞ見へるよりの「紅」
て高田馬場の茶屋上の方に料理屋一軒　卒八「だのぶ
ちやの方を間違て居
ぶ　野呂「そのあさ茶の方を間違て居て
本ところう　眼七「おろまつ〳〵ふ見へ錠つけられ小ろ見へんな
腹の門にをらぶくろ〳〵」本読ヲイ　女中「鰺ぶやらば天ぷら
うして貰ひてへんぐ下女ハイ　卒八「ろくせうト立
て行ひまく蕎ぶろうの見へるよ〳〵。何ろきろ〳〵と
ちて。羽織の裾より尾尾をどあ〳〵ん世四入ろべし。

けれ円さのぜんの下女ハイぶ鰺の天ぷらハ出来ろね
まだ　眼七「ハテ七ん〳〵らくでの油揚ですからら。
二三十枚ぜ七人金　女ろ「ハく〳〵と言ふ眼七コウく〳〵ト
呼ぶ　其油揚ハ女のこたくけぶよく切火をおろけて。
焼ずゐ生でよう〳〵　女ろ「と下女人這入る油揚ものあて
向より　卒八「ぜんる物ぶの前ろ入ろ〳〵ぜ　眼七「ヲ七ろら
テンツでの向より左二郎アバ太郎　弐六出月助吞七卒
八何ぶ町人の藤蛍籠大ろ入ろ〳〵ぶ出来り。

同じく山酒屋人くる下女出迎そまつよわのさろよろ
ちくろろてこの〳〵捨ぜりふまて上の方障子家作〳〵這
入る野呂「ムシよりうんろふのナ　眼七「ナゼ〳〵　野呂「黒いよろご
まろ〳〵こ夏をいろらよろうんろ　眼七「ろまろねく〳〵　本読「とあ
めろう眼七ハ真ろを浮び。京　何ろ詫宜めたる夏ぬて不
繁昌家繁昌其外うましぶらせまのよろまりく
きらぐ　眼武「ろ〳〵ろ作者ごナろ。うれしぶらせる夏をりく
きらぐッ。せろふまつけねくぬ東京ろれ　眼七「天方ろれ

胸ろ腹ごろう　眼七「ろッちゃッちゃけ。ぬまぶ汲ごらぶぶで
もいハ左三「ヲット考ごらく〳〵。イさなろく〳〵ろろまるすぶご。
マッ本続をバぬづろう。ろいろろく聞くいられねまぶぬ
ろぬ後ろ考ろ　眼七「ヘンぜぬぶど甲くす。それごろらぬん
まろ人をろたびられくぬんご　左三「いサく廣言八沼の
と。夏をまろ〳〵ろのら達ハ狐の小屋委に居てぶぬするぶご
眼七「ぬ人方のろうでバ呑ろ。ごろら渡りぜろふの雑談そぬ
うちに甲ろく蛍を取りに来く一足まそらねくとれで

八笑人 四編 上

八笑人 四編 上

飯つてゐいくるけどねへるぞと。てゝが方へ聞える様よ
をきのく亭主ゴ向つく隣の奥さのものぎゝ蛍将れ
来さやらとゴんゴるぞ其蛍が呼ふるくてゐうれら飯朝
のうん 左ニ「唐へ行ゴ来めくしゝ帰郷といぐがあるものゴ。
眼さ「飯國ゴ 左ニ「飯宅サ 眼七「マアちゴとぐらゐゴる変ハいゴるま
春七「唐と高田ぐらゴ。きゴのい遠ハねへ 眼さ「ゴえのゴゴ生る
よトルゴ 子 飯宅のゴん近ふ金盛の友子友達へ 野呂「アゝ
まゴのいくぐさナ。稲荷さゴぐゴゴうナ 眼さ「ゲきゴ生るぞゴゴ。

さ手ゴぐ當所ふ繁昌の元ゴゴるぞゝ 左ニ「基ひぐゴゴう
眼七「ゴゴゴゴなるぞゝ我通ゴ方をゴのく蛍を取集て
ゴゴぐゝといゴゴぐゴゴ勝ゴのゴく方をゴのく手ンプイく
行代の出家と何ゴ呪文をゴゴゴ向の方へ蛍ぐゴゴハ
まゴ 「ぐゴしてゴゴられる 左ニ「それゴ来くぐゴゴ生るのぐ
ゴゴら花火ですよゴゴゴぐゴゴ迄ぐ向へ廻りそゴるのゴ 眼七「ゴゴ
よゴ生ゴゴぐ役ぐ 野呂「ヘンゴりぐぞゝ蚊ゴ喰れゴぐゴら蛍
花火をポタリくゴゴく居るのぐナ。智恵のねへ 春七「其役

を考ねへ所が総身のあつかひでまねへから役不足をいふ
事いねへ　眼七「何サまごつくな大役があるよ。そこでみんなが
ソリヤ花火があがるといふと見物して蛍をどんどんいれるふり
卒八「やつぱり花火があがるといふくいの　眼七「エ何サ蛍が
卒八「あがるといふのか　眼七「蛍のあがるをいふがあるものか。
あれこそ事だ　卒八「作者のいひつける通りにいふ気ごろ
らう　眼七「ちつとぐらゐのいひそこなひはよいがでへげへよすの
をやうするがいいハとおれツて豆　大縣「ハヽヽ、ちよいと悪口がきへ

眼七「そこでみんなが。蛍を追ひまはして取るふりをするな
がら花火をきつかけの。網がなくて籠へ入れるふりで
兼て持参の蛍を持つて元の籠へ入れる　出目「内のものも
皆同じく取りに出たらどうする　眼七「そうやつちまふが　呑武「猫の
眼七「おれの者がまはそいらを中へつけて、そいつのことは
まその所をつけるへ　呑七「ハヽヽ　井口が野郎どもサアとれから
皆とぶまがいかかはるから。皆でよ取り懸る気でやら田
し。そこで内の奴らも出やうとするを　眼七「コリヤく内の

者どもハ変てこ出る変毎用と雷てこ有へ。ドロンくで
蛍をわら引すんごろ。円の奴ハおそれいろく。うんと
でる。なまぐいの通りにるるごろう　左三「そのうまくさいけば
眼七丈のてごらう　眼七「所へ野呂公が猟人の格そ狐
寄を持く来く。其庭へ死ゆ思入ありてずを。小
蔭へ這入るそまうるとこしが魚をひとはそ生てそろく
乱目くつくつるくと庭へ飛ひる円の奴ハあ寄
出るくをくまんぜ。寄のたばをつくと行すくを

をきのりけわ「爰へ猟人のめも撃けをくきろねるるぐ
整鉄るきたり」ト一中節の信田妻を左三さん一トロかこと
だ　出目「へン素人が呑口を抜ようひれるナ　左三「ようく
眼七「ことでこそ言葉のかまるまでやしづく思入の振ぐめるく。
「横山のきづるをうけ」トいをまろうけハ皆一時に高田の馬
場の狐をつろる。テンくトツくン。テントツくントテ赤線系統皿井
其外見合ごうと当ま見ぐ。
ハたまぐいぐ向鉢巻の中ける踊りになるといのご　卒八「是ハ

眼「何眼公にもそれ。コレも是也
何ぞと思へ　卒八「左三郎方に居ひと思へのか　左三「そもそこい
もねことどもるぬ。そりゝ成程愛将の影でハこそうざらぬ隠れ
よろろぬく。本そこに頭ろめこいろろ思ひく大内業ぢ。
ろこぶ言葉のうちかしーの思へぐ入すぬ是ぶよ其思へ
も夜の哀ぢらぬ。ま入ぬでもよ。「その
あぬのぢハ。何も誓吉ぢまーの哀すいーずぬ。すぐぬ
まいノ　左三「イヤそのぢねくテ。獨り舞臺のうちぶ眼公にハ

チト大役ぢよ　眼「ヘン業ぬ腰ぶるぬて正本をそる
めるナ　左三「女島の雪深ぬ其ぬそぢ。しぶ不
業ぬぐぬらねく　眼「是程の哀を書腰ぢら。業ぬ
そるるぬんぶ業ぢのそのいるる何すそれぬたよ
腰も尻ぬるめる　卒八「そのぬ。ぬぬぬぬ。明地ぢれ
ハぬるる哀ぢ　ぢ「ヘン洗張ぬぬ並を業ぬぬ　眼「それ
程不業ぬぬら淮ぢ哀ぬたぬ。ぬぬ一チ番ぬぬく
ぬぬく業ぬ　業「そ哀ぢいく業ぬ亭主ぬ成く哀ぬ

七宝亭
枡盛

眼七「サアさんなまぐろけ〳〵ぐさ　左三「ちょとこ来よそちら
ちらちらぐめんしんちてくちらこるのごサアまぐめぐめ
〳〵　弐「よし〳〵。サア亭主よ遊ちこ。ぐまくぐちらぐさ
眼七「よし〳〵。サアこい　弐「へイちらぐびるこちまくる　眼七「ヲヽ
あのちらちらの其方は家の〳〵このしろ　左三「このこのこちらぐちのはめまちどこの
ちのちる　眼七「亭主ろ　弐「ハイ左様ぐどざります　眼七「フン
名は何とや　弐「頂戴六とヤまた　眼七「年はいろくこる
弐「へ〳〵三拾五ぐでおざります　眼七「宗旨は何ぐ　弐「ヘイ

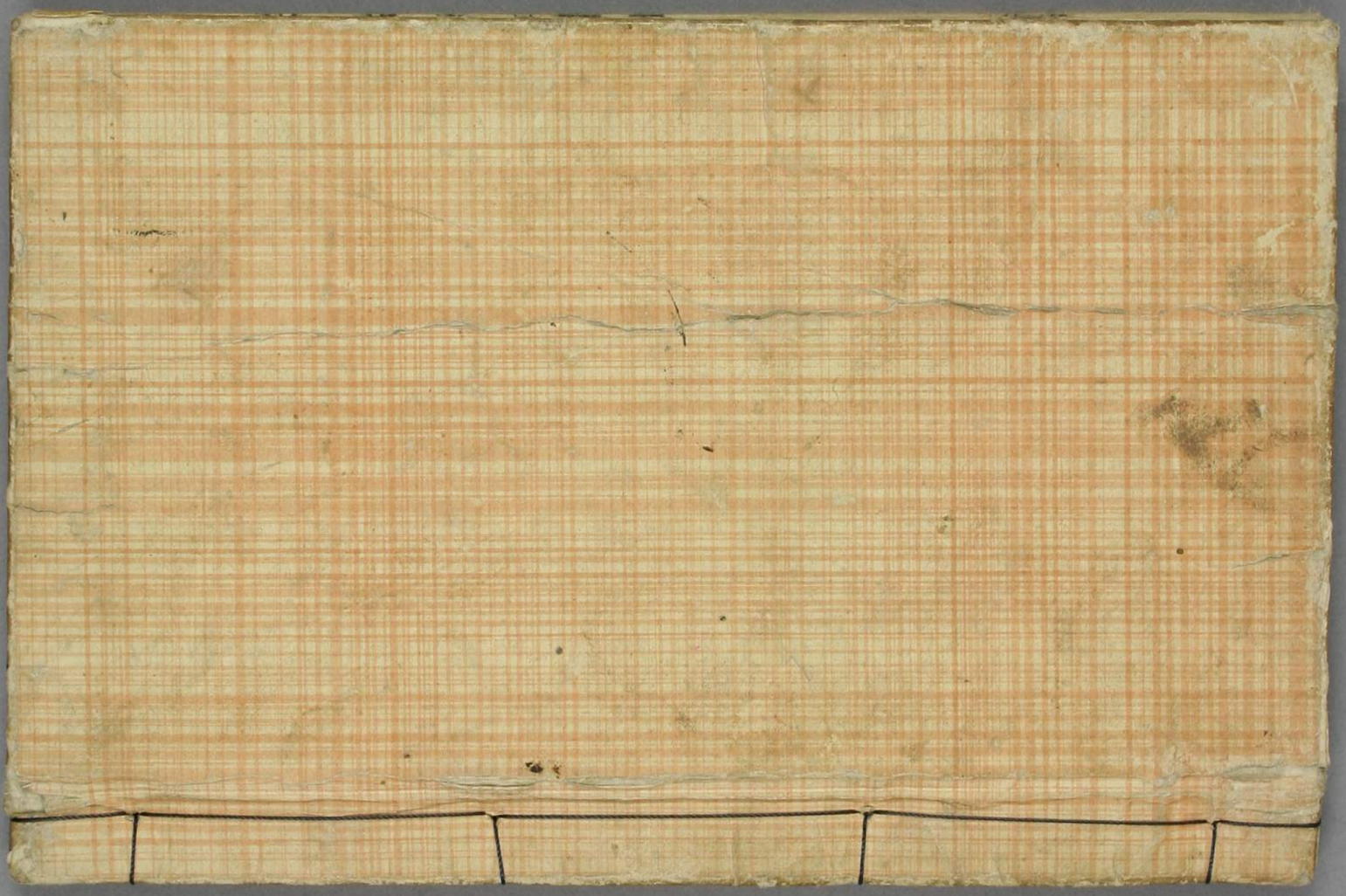
宗旨ハそれ浄土宗ぐおざります　眼七「寺はどこぐ　弐「浅
草ぐどざります　眼七「菱れは何時ぐ　弐「ヘイ菱れ。イヤ
はべらぐちうぬぐまぐろ久しちちぐる　眼七「くあちまくく。
そ女房はいろぐ　弐「めれまり　ちつッとこのぐちちねへか　眼七「マア
ちれでも菱ぐはは遊ちまくこる　弐「ヲイく。それ廿五
でおざりまた　眼七「ちく後年ぐナ　弐「へエイエ女は後年
でおざりまた　眼七「ハアそのちナ　弐「へイ男ぐ廿五女ぐ十
九とヤことでおざりまナす　眼七「ちちち不便ち支といてここナ

弐「ヱ甚ごぶごりまし　眼「おまえ又仲間ごとこと　弐「ごん一太
郎ごの郎ごまんを出るやうごなるべらごりも　眼「まくまま
ごめごく。々廿五文でい　弐「けッとうるおい料理ごごり
まるる　眼「是サまごやごとこのくや廿五文でい。モウ役
ハ海ごゑ　弐「イヱまご三十三とやぶごります　眼「ナニ
三十三ごある。ヱまハ九ろ　弐「へイ九でごごりまく
眼「フウ。ヱまを其朱と武百ふ買ろう　弐「ごゐいくまく
て揃目ハ中カ間でる。ヱまハ買くません　眼「ヱモウ百買れ

弐「チョッロあけご上げ　まあやう三百でい宮ふ買ふでご
ろうまチうご其ろうろう當りの廿ろ。四税義をまご　眼「ヱ
ろろやアひくごきのめハ何ごゐ出ご　弐「おまもまごゐ番を
ろれくくごきのめハ変ごメくと氣ごご　眼「おまもまごと
氣ごヨ宮数をこれくうらごこのくみごよノウ　弐「ちご
ねくくくゐ番をこんるとめでもグッろ氏ハかとれるテ
ヨとれハ地金ごご実ふ一ッきらねくでハモウくこちきれね
ヘヶ　左三「コレとうるアごくくこのご　出肯「そあよ稽古ごを

ひるから新しいも甘ずに明くくるのかうぬらが勝負
咲くとしてひるゼトあく笑うそ　眼「コリヤく真っ白
眼七「へいく　眼武「えんどうがひるのよに四象福徳をさげ
つるす　眼七「へいく　左三「こいつはなかなかりっぱの美　左三「コレサ眼七
の方が狐でいねえろ　眼七「そんな左指ぐてどざりまし
まことに義おけりま　左三「そんどうひちやくちやか
えうこいたまるべらぼうど　出目「ソウどらく　左三
でいはいはいもうくうろに夢立

てひるから　ひづくしのハ真っ盛対だろうどそれも
今夜中うくつく責こさら　ちりとハロがかぶれるどろう
く　鬼角口数をきろぬよにすまびい　そまハまう
借盃とくもえこ　ろ後の内が酒切まどちっぷり
小酒と　「へこさろうらてんぐ茶碗で　ひりて
居るのよ　左三「如来のねくあらごぶりで　きづっぶと
四つこ　ナそこ闇こら　こまらうくうくあこ眼ム
くらこと何でのあるものをナ　眼七「前崎のみさ

げた下駄ハどのぐ　左三「そ古いく　きやぐらずと早くさろ
せ人　そのうちまのそう　円　縄張のあで虫を押へてひとゝ　毛ぶり河の
ぞうくこ雑ぞう　時をうゝ川しぬ

花暦八笑人四編上巻終